

博士論文 要約

介護初期段階の家族介護者へのタブレット端末を用いた認知症ケア教材の開発

Development of a tablet-based educational material on dementia care

For family caregivers in the early stage of care

看護学研究科看護学専攻 老人看護学教育研究分野

学籍番号 13ND3251

青柳 寿弥

Hisami Aoyagi

I. 研究の背景

家族介護者が認知症高齢者の介護を困難にしている要因の一つに、何度も同じことを繰り返す事や妄想等の認知症症状の対応法が分からないことが挙げられる。家族が認知症高齢者を介護する上で、症状の対応が困難となることは、認知症高齢者とのコミュニケーション手段をも絶たれることにもなり介護すること自体が難しくなる。

先行研究（青柳ら 2017）では、認知症看護に難しさを感じている看護師が多く、病院で働く看護師を対象に e-learning を行い、その学習効果を明らかにした。先行研究の対象者特性が異なるものの、認知症高齢者を介護する家族も同様に、認知症高齢者との対応に困難を感じており、家族が介護の参考にできる教材を開発することは極めて重要であろう。特に介護初期の家族は、病気の理解が十分ではなく、その対応方法も十分に情報を得られにくい状況にある。そのため、この時期の家族が抱えている、あるいは抱えるであろう問題等を取り上げた身近な事例をもとに、認知症高齢者の気持ちに目を向けた対応をどのように行うか具体的な方法を示し、家族が実際の介護に活用できる教材を提供することが急務であると考えた。

II. 研究の目的

本研究は、介護初期における認知症高齢者の家族介護者に向けた認知症ケア教材を開発する。また、家族介護者及び医療者の教材評価により、教材を精錬することを目的とする。

Ⅲ. 用語の定義

1. 介護初期段階：

認知症高齢者がアルツハイマー型認知症と診断された時期から、家族介護者が介護して3年未満の時期

2. 認知症ケア教材（2016年製作）

本研究で開発する「認知症ケア教材」は、介護初期段階における認知症高齢者の家族介護者対象の看護の視点に基づいた認知症ケアの知識や情報を獲得する電子媒体の教材と定義する。尚、この教材はコンテンツ作成側が教え込むという教材ではなく、学習者である認知症高齢者を介護する家族介護者が、教材を自主的に、かつインタラクティブに活用していく教材とする。

Ⅳ. 研究の構成

本研究は以下で構成する。

研究1：認知症ケア教材の分析、設計、製作

ISD(Instructional Systematic Design)の教材設計のプロセスやCAI コースウェアの作成手順を参考に教材を開発していく。具体的には、認知症高齢者を介護する家族介護者の特性、教材の使用環境や教材目的やコース目標・到達目標について既存文献をもとに検討する。また、検討した結果をもとに、教材のコンテンツ構造の決定と設計仕様書を作成する。更に設計仕様書を元に教材内容の詳細化を行うためにストーリーボード作成し、教材を完成させる。

研究2：認知症ケア教材の実施評価と精錬

研究1の対象者分析の結果で決定した認知症高齢者を介護する家族介護者個々に、研究1で開発した認知症ケア教材を用い教材提供を行う。具体的には、研究1において明らかにした家族介護者特性を持つ対象者に教材を使用してもらう。その際、教材使用の直前、使用直後、及び2週間後に半構成的面接を行い、1)研究1で各教材内容にある認知症ケアの困難感・不安感の評価、2)1)の同項目の認知症ケアの対応についての評価3)教材内容の評価、4)教材の操作性等の機能における評価、5)家族介護者の教材提供後の所感やニーズ等の自由回答を得る。また、医療専門職に開発した教材の内容妥当性及び実用性について検討する。これらの結果を統計学的な分析及び質的帰納的分析を行ない、その結果をもとに教材の精錬を行う。

Ⅴ. 倫理的配慮

本研究は、研究の各段階において千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の承認を受け、研究の全過程にわたり、任意性の保障、安全性及び負担軽減の保障、プライバシー・匿名性・個人情報の保護に関する倫理的配慮を行い実施した。

VI. 研究 1 : 認知症ケア教材の分析, 設計, 製作

1. 方法

ISD (Instructional Systems design; 教育システム設計) の基本形となる ADDIE モデルや, CAI (Computer Assisted Instruction) コースウェアの作成手順を参考に, 家族介護者の特性, 学習課題, 教材使用環境における初期分析の検討, 及び設計, 製作の 3 段階の過程を経て教材を完成させる.

2. 結果

介護初期の家族介護者は, 被介護者である認知症高齢者への対応に心身が不安定ななか, 医療者との繋がりが少なく, 認知症介護の模索とその情報書くときに限界を感じていた. このような背景と分析より明らかになった学習課題から, 学習者としての家族介護者は介護役割を獲得する途上にあり, 教材単元を「認知症高齢者とのコミュニケーションのポイント」「認知症高齢者との対応方法」「社会資源」「家族介護者の健康管理」の 4 項目に決定した. また, 教材媒体には, 家族介護者が時間や場所を選ばず主体的に学習できるタブレット端末に決定し, タブレット端末に認知症ケア教材を導入し完成させた.

VII. 研究 2 : 認知症ケア教材の実施評価と精錬

1. 方法

研究 1 で想定した認知症高齢者を介護して 3 年以内の家族介護者 8 名を対象に, 認知症ケア教材を提供し, 教材を使用した評価を実施した. 同時に医療者 4 名による内容妥当性と実用性の評価を実施した. それらの学習対象者である家族介護者の反応の評価, 及び医療者の教材の評価から抽出された量的及び質的データの結果から, 次の 2 点, 教材が学習対象者に適合しているか, 教材の質が確保された内容であるかという視点に基づき教材の精錬を行なった.

2. 結果

認知症ケア教材は, 研究 1 で想定した家族介護者の特性やニーズに概ね一致していた. また, 学習形態や教育媒体においても同様に概ね一致していたが, 家族介護者が教材を持ち運び, 他の家族と知識を共有するような活用もしていた. 医療者による評価においては, 教材内容の妥当性が示された. 教材の改善点として, 基本的な修正はないものの, 各単元の細かな追加修正項目が明らかになった.

VIII. 考察

今回開発した教材を家族介護者が活用するにあたり, 知識や情報獲得手段に限界のある家族介護者にとっては新たな知識や情報の獲得ツールとして, 既に知識や情報を獲得していた介護者にとっては, 獲得後の知識の整理や再確認の場として活用していた. しかしその一方で, 家族介護者自身が情報収集の手段を持ち得ていても, 教材内容を把握しているとは限らず, 家族介護者自身の情報収集には偏りが生じている可能性がある. 本教材のように, 介護初期の家族

介護者に体系的かつ質の保証された知識や情報提供により、家族介護者が正確に整理し獲得することが可能になる。そして、知識を得ることが、認知症の受容を高めたり(塚原ら 2010)、家族介護者自身の自律(Bull 2014)へと繋がる。また、家族介護者は、教材から知識を得るだけでなく、自分だけが苦しんでいるわけではないと疎外感を軽減させたり、自分の行動を振り返り気分を切り替えたり、情緒的な面にも変化を与えられており、このことは副介護者がいないような1対1の在宅での介護の中で、家族介護者の補助的な役割も兼ね備えているといえる。さらに、持ち運び可能なタブレット端末は、離れて暮らす家族員にも情報を正確に伝えられ、家族間の共通理解や統一した関わりにより、認知症高齢者の症状安定にも繋がると考えられる。このことは家族間だけでなく、近所や友人といった認知症高齢者とその家族を取り囲む人々への共通理解へと広げられ、住み慣れた場所で認知症高齢者とその家族が安心して暮らしていける一助になり、介護初期から一環した看護支援に認知症ケア教材が活用できるといえよう。

また、今回、介護初期段階における認知症高齢者を介護する家族介護者を対象とした教材開発にあたり、国内外の先行研究を概観したが、教材内容を検討した研究(Smithら 2011)や教材開発プロセス自体を報告した研究は殆ど見当たらず、開発したプログラムの実施成果報告が主であった(Glueckaufら 2004, Chiuら 2009, Lewis and Hepburn 2010)。海外における検証されたインターネットベースのプログラムは、既に対面式の家族教育で展開された内容やブックレット内容をWebベースに変換したものであり、それぞれのプログラムにおける教材内容の具体的な抽出方法を明らかにするは限界があった。本研究は、ISDやCAIコースウェア作成を参考に、文献検討を基に学習対象者と学習課題、および教育媒体における緻密な分析・設計を行い、製作を目指した。このような開発過程を経ることで、教材評価あるいは学習効果などのフィードバックにおける改善、あるいは今後の教材開発の基盤になるといえよう。

今回、介護初期における家族介護者用のタブレット端末の認知症ケア教材の開発は、初めての試みであり、基礎的な研究と位置づけられる。今後、研究対象者数を増やし、教材の効果検証や看護支援への実証研究をしていく必要があると考える。

また、製作した教材は、研究1で行なった初期分析において対象者分析、学習課題分析、教材媒体分析から、設計、製作へ至った。分析過程における文献検討においては、介護初期に限定した文献数に限りがあり、介護期間を限定せず抽出した文献精読から、介護初期にある家族介護者の特性やニーズの抽出から設計、製作を行なった。その結果、研究2において、介護初期の家族介護者から得た教材の評価より、研究1で想定した対象者特性やニーズと大きく異なっていなかった。しかし、家族介護者のインタビューを重ねていくことで、家族介護者が認知症介護において抱えている困り事や疑問、あるいは認知症高齢者への思いなどを抱いていたことが明らかになった。今後さらに認知症ケア教材を発展させていくために、今回得られた評価を活かしていくことを含め、介護初期の家族介護者に限定した基礎的なデータを蓄積していくことが必要であると考えられる。

引用参考文献

- 青柳寿弥, 竹内登美子(2017) : 「認知症高齢者とのコミュニケーション法」の e-learning 教材の開発, 日本看護研究学会雑誌, 40(2), in press.
- AlzOnline Caregiver support online: <http://alzonline.php.ufl.edu/> , (閲覧日 2014.9.30)
- Bull, M. J. (2014): Strategies for Sustaining Self Used by Family Caregivers for Older Adults With Dementia, *Journal of Holistic Nursing*, 32, 127-135.
- Chiu, T., Marziali, E., Colantonio, A., Carswell, A., Gruneir, M., Tang, M., and Eysenbach, G. (2009): Internet Based Caregiver Support for Chinese Canadians Taking Care of a Family Member with Alzheimer Disease and Related Dementia, *Canadian Journal on Aging*, 28(4), 323-336.
- Glueckauf, R. L., Ketterson, T. U., Loomis, J. S., and Dages, P. (2004): Online Support and Education for Dementia Caregivers: Overview, Utilization, and Initial Program Evaluation, *Telemedicine Journal and e-Health*, 10(2), 223-232.
- Lewis, M. L., Hobday, J. V., Hepburn, K. W. (2010): Internet Based Program for Dementia Caregivers, *American Journal of Alzheimer's & Other Dementias*, 25(8), 674-679.
- Smith, E. R., Broughton, M. Baker, R., Pachana, N. A., Angwin, A. J., Humphreys, M. S., Mitchell, L., Byrne, G., Copland, D. A., Gallois, C., Hegney, D. and Chenery, H. J. (2011): Memory and communication support in dementia : research-based strategies for caregivers, *International Psychogeriatrics*, 23(2), 256-263.
- 塚原貴子, 宮原伸二, 山下幸恵(2010) ; 重度認知症患者の在宅介護が継続できた要因-家族介護者から聞き取り調査-, *日本農村医学会雑誌*, 59(4), 461-469.